

# 中上級日本語学習者の物語描写における名詞修飾の使用実態

－名詞修飾の習得研究のための新たな分類基準を用いて－

徐 乃馨（首都大学東京大学院生）

## 要 旨

名詞修飾は日本語を習得する際、難しい項目の一つである。日本語母語話者が談話展開の機能を担う名詞修飾を使用しているが、学習者は使えていないとされている。如何にして習得を促進できるかを解明するために、学習者の使用実態を調査する必要がある。しかし、これまでの研究では、名詞修飾の分類基準が曖昧であり、学習者の母語の影響が不明である。そこで、本研究では、新たに分類基準を設定し、中上級学習者である中国語母語話者、韓国語母語話者のデータを対象に調査を行った。その結果、「行為主体者」、「時間差あり」タイプの名詞修飾、物語の展開ポイントでの名詞修飾の使用は中国語母語話者が有意に少ないことがわかった。なぜ中国語母語話者が談話展開機能の名詞修飾を使えないのか。それは、中国語の名詞修飾が日本語と違うからであると考えられる。また学習者は名詞修飾の代わりに、「(接続詞+)テ」、接続助詞を使用することが明らかになった。

【キーワード】 L2習得 名詞修飾 物語 談話展開 中上級学習者

## 1. はじめに

日本語の名詞修飾は談話を展開させる機能を持っている。特に非制限的名詞修飾は、用いることで情報の背景化や構文的な冗長性の回避ができ、文章がよりコンパクトになり、本筋が明確になる（山田 2004）。しかし、日本語学習者は談話展開機能の名詞修飾を十分習得できていないとされている（増田 2001、2002、矢吹ソウ 2013）。如何にして習得を促進できるかを解明するために、学習者の使用実態を調査する必要がある。

しかし、これまでの意味・機能の観点からの習得研究は、学習者の母語の影響が不明であり、談話における名詞修飾の機能的な観点から研究を行った増田（2002）の分類では「行為主体者」や「時間差」という観定の定義が曖昧であることから、新たな分類基準が必要であると考えられる。

本研究は、先行研究を踏まえ、新たに名詞修飾の機能を分析するための分類基準を設定し、日本語母語話者と中上級学習者による物語の作文における名詞修飾を、意味・機能の観点から比較分析を行うものである。

## 2. 意味・機能の観点からの日本語の名詞修飾の習得研究

これまでの意味・機能の観点からの習得研究は、ア) 名詞修飾部の特徴、イ) 被修飾名詞の特徴、ウ) 名詞修飾節と主節の時間的關係、の3つの面から名詞修飾を捉え、名詞修飾の機能を分析している。

まず、ア) 名詞修飾部の特徴について、修飾部の状態性が習得に関わるとされている。大関(2008)では、学習者が使用した連体節を属性性・状態性の高い順に「属性・状態」「習慣」「進行」「過去・未来」に分類した(表1)。

表1 修飾節の状態性(大関 2008: 110表4-5)

属性・状態		習慣	進行	過去または未来の出来事・状態	
形容詞節	形容詞的な「タ」結果状態/状態動詞/恒常的習慣			属性的	出来事的
髪が長い人	着物を着た人/似ている人/役に立つ言葉	日本で働いている人	歩いている人	昨日買ったお菓子/友達にもらった本	昨日見た映画/明日行くところ
+属性・状态的				-属性・状态的	

左のものほど意味的に形容詞に近く、右のものほど特定時点の出来事や状態を表す修飾節になると考えた。自然習得者と教室習得者の発話を分析した結果、自然習得者には「形容詞に近い名詞修飾節から使われる」という習得段階が観察されたが、教室習得者には教科書の影響で、早い段階から「過去・未来」の修飾節が使われると指摘された。

この状態性による分類は従来の名詞修飾の習得研究とは違い、名詞修飾が「属性的」であるか、「出来事的」であるかを捉えることができる。特に、特定の時点に位置付けられない、属性・状态的なものの存在と、特定の時点に位置付けられる出来事性の高いものとの対立させている点において、修飾部にとどまらず、被修飾名詞ないし主節を分析する際にも参考にとけるといえる。

イ) 被修飾名詞の特徴について、「有生・無生」「(ヒト・モノ)」「行為主体者・被観察物(者)」の対立で調査が行われている。その結果、学習者は「ヒト」「行為主体者」を主名詞とする連体節が使えていないことがわかった(増田 2002、矢吹ソウ 2013)。また、学習者の使用に、被修飾名詞が修飾節における文法的役割が主語である修飾節は有生の名詞を修飾するときに使うという分布が見られた(大関 2008)。

大関(2008)が、「有生・無生」だけではなく、「有生・無生」を、修飾節における被修飾名詞の文法的役割と組み合わせて学習者の使用を分析したことで、学習者の独自の偏りが明らかとなったのではなかろうか。

ウ) 名詞修飾節と主節の時間的關係について、日本語母語話者は偏りなく使用するのに対し、学習者は主節の事態と時間差がある事態を表す連体節(以下「時間差あり」)が使えていないことがわかっている(増田 2002、矢吹ソウ 2013)。また、伊藤

(2012) では、学習者は「ル形」で「時間差なし」、「タ形」で「時間差あり」の連体節を使用することがわかった。

このように、「ル形・タ形」という形式の対立ではなく、修飾節と主節の時間的關係を分析することで、名詞修飾の機能の解明に近づけると考える。

例えば、増田（2001、2002）では、「時間差あり」とされる「談話展開型連体節」という名称を提案している。「談話展開型連体節」にはa.時系列にことを連ねる機能、b.〈現象・出来事〉から「ヒト（行為主体）」へと視点を転換させる機能、そしてc.先行文脈をまとめ直し、主節に受け渡して関係づける機能があるとされている（例1参照）。

(1) 怒った親は、子供を叱った。(増田 2001 : 50)

しかし、学習者にとって、このタイプの名詞修飾は習得しにくいとされている。さらに、学習者にとって習得しやすい順に、描写的な機能を持つ「時間差なし&被観察物（者）」タイプ>「時間差なし&行為主体者」タイプ>「時間差あり&行為主体者」タイプと想定されている（増田 2002）。

以上意味・機能の観点からの習得研究の結果を図1にまとめる。

ア)修飾部	イ)被修飾名詞	ウ)修飾節と主節の時間的關係	名詞修飾の機能	習得段階
属性・状態 ↓習慣 ↓進行 過去・未来	被観察物（者） ↓ 行為主体者	時間差なし ↓ (時間差あり)	描写的 ↓ (談話展開的)	↓ ↓ ↓ ↓

図1 想定される学習者の名詞修飾節の習得段階

### 3. これまでの習得研究の問題点と本研究の位置づけ

しかし、これまでの習得研究には以下の二つの問題点がある。

一つ目の問題点は、調査対象の母語と習熟度統制が不十分なため、母語の影響が十分考察できなかったことである。表2で示すように、伊藤（2012）は、学習者の母語が中国語のみである。一方、学習者の母語を複数集めた増田（2002）、矢吹ソウ（2013）は習熟度の統制が不十分である。

そこで、本研究では、習熟度が統制された、中国語母語と韓国語母語の学習者が対象である、日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス（以下「YNU書き言葉コーパス」）を用いて調査を行い、学習者の母語の影響を分析する。YNU書き言葉コーパスの対象者は日本語母語話者30名、中上級学習者（SPOT48-65）の中国語母語話者30名、韓国語母語話者30名である。このコーパスでは、学習者の習熟度が統制されているため、同レベルの中国語母語話者と韓国語母語話者とを比較分析できる。そして、学習者は、習熟度とは別に、作文の評価<sup>1)</sup>をもとに、さらに上位群、中位群、下位群

に分けられているため、相対的に中級から上級にかけての変化を見ることができる。

表2 先行研究の調査対象の母語と習熟度

先行研究	対象母語	対象習熟度
増田2002	日本語、学習者出身：韓国、中国、アメリカ、スペイン、シンガポール、ブラジル（例文より）	中級、上級（基準：クラス分け、上級はJLPT1級くらい）
矢吹ソウ 2013	日本語20名、英語、中国語、韓国語各10名（カナダの大学在学）	「カナダの大学の日本語コース二年生を終了した学習者」
伊藤2012	日本語10名、中国語12名	日本語学科生、レベル5、レベル4（基準：クラス分け？）

もう一つの問題点は、「行為主体者」「時間差」の定義が曖昧だということである。そのため、談話レベルにおける名詞修飾の機能を分析するには、分類の基準を新たに作る必要がある。以下「行為主体者」と「時間差」の、それぞれの定義の曖昧な点を述べたうえで、本研究における両者の定義を提示する。

まず、「行為主体者」について、増田（2002）では厳密な定義が見当たらない。「静的な要素」としての「ヒト」は「行為主体者」に、「動的な要素」としての「ヒト」は「被観察者」にするという記述では分類が曖昧になってしまう。また、修飾節が主節での文法的役割や、主節の述語<sup>2)</sup>で分類されているように見受けられる。例えば、主節において主語の役割を担うものは「行為主体者」に（例2）、主節において目的語などの役割を担うものは「被観察物（者）」に分類されている（例3）。

- (2) うしろに立っているお父さんが何とか口をあけさせようとした。（増田2002：44、例10、行為主体者）
- (3) おとうさんはお客さんに玄関に置いてあるかさを貸してあげました。（増田2002：44、例7、被観察物（者））

しかし、談話展開に関わる機能を分析するためには、「行為主体者」であるかどうかは主節だけではなく、修飾節における被修飾名詞の役割も見なければならぬ。例えば、例4a、4b両方、「次郎」が主節において主語の役割を果たしているが、4aでは、「次郎」が修飾節において目的語、4bでは、主語である。4aと比べ、「次郎」を主語に据え、受身形を用いた4bのほうがストーリーの展開によりふさわしい表現であることがわかる。

また、主節や修飾節での文法的役割に加え、被修飾名詞の有生性も関わっている。例4bと4cとでは、有生の「次郎」は行為主体者として捉えることができるが、無生の「次郎のランドセル」は行為主体者ではない。

- (4) a. 太郎は次郎をランドセルで叩いた。太郎が叩いた次郎は泣きながら、お母さんのところに行った。
- b. 太郎は次郎をランドセルで叩いた。太郎に叩かれた次郎は泣きながら、お母さ

んのところに行った。

- c. 太郎は次郎のランドセルを叩いた。太郎に叩かれた次郎のランドセルは壊れた。(作例)

そこで、本研究では、修飾節が主節において果たす文法的役割と被修飾名詞が修飾節において果たす文法的役割、それに、被修飾名詞の有生性の3つの分析項目を設定し、被修飾名詞の特徴を捉える。特に、談話展開の機能が期待される、主節、修飾節両方において主語であり、かつ有生の場合は「行為主体者」として分析を行う(図2)。

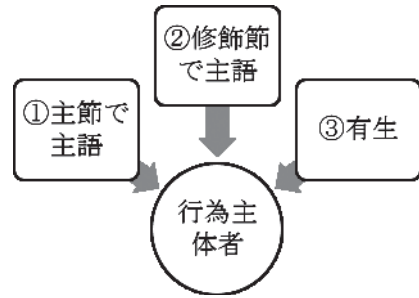


図2 行為主体者の定義

次に、「時間差」については、増田(2002)では、事態の生起時の時間差ではなく、「主節時の事態」の発生時に「連体節の事態」が並行的に存在しているかという基準で判断すると述べられている。例えば、例5では、お父さんが見たとき、コボちゃんが傘を持っているため、時間差がない。

- (5) 駅でお父さんは傘を持ったコボちゃんを見ました。(増田 2002 : 46、例14、時間差なし)

- (1) (再掲) 怒った親は、子供を叱った。(増田 2001 : 50)

しかし、「時間差あり」タイプとされる例1で考えると、親が叱った時に、連体節の事態「怒った」が並行的に存在しているので、「時間差なし」となり、分類がぶれてしまう。

このように、時間差の定義の問題で、矛盾が生じる恐れがある。そこで、本研究では、「時間差」を以下のように定義する。「時間差」とは、修飾節事態の生起時点と主節事態の生起時点間のものである(図3)。発話時点との関係性は考慮しない。

修飾節事態の生起時点は、修飾部の状態性に関わり、形容詞的なもの(つまり、「属性・状態」「習慣」、表1、表3参照)には時間の関係がないと考える。例えば、例6の修飾部「『おりひめ』と言う」は「属性・状態」であり、事態の生起時点が捉えられないと考える。そして、主節事態の生起時点は、主節における被修飾名詞の文法役割に関わり、主節に述語のないものは時間が

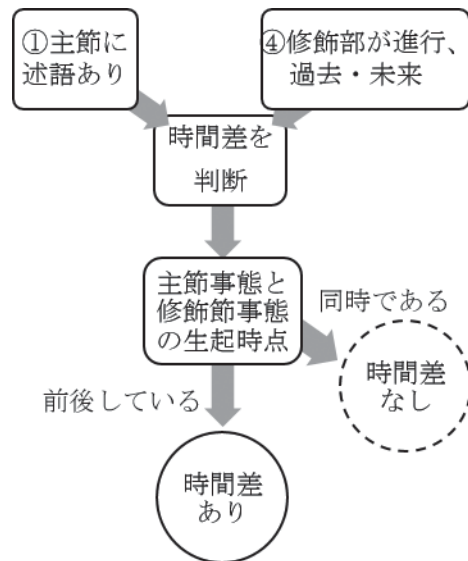


図3 時間差の定義

捉えられないと考える（例7参照）。

(6) 昔、「おりひめ」と言うお姫様がいました。(j014)

(7) それまでの幸せな生活は一転して、どん底につき落とされた2人。(j007)

つまり、時間差を判断するには、修飾節も主節も特定時点が捉えられることが前提であり、片方でも欠けていれば、時間差の有無が判断できない。

以上、先行研究の2つの問題点を踏まえ、学習者の母語と習熟度が統制されたデータを対象とし、「行為主体者」「時間差」の定義を明確にした。

## 4. 分類基準と研究課題

### 4. 1. 分析対象

名詞修飾の取り出しに関しては、何をもって「修飾節」とするかは議論が分かれるところだが、本研究では、先行研究を参考に、分析の対象と対象外とするものを以下のようにする。

分析の対象を、内の関係にある名詞修飾節で、名詞修飾節が単文に戻せるものにする。具体的には、「名詞+という」(天の川という川)、形容詞で補語を伴うもの(2人の楽しかった時間)、形容詞で過去形のもの、動詞(はたをおる女の人)による修飾を対象とした。読点を挟んで後続部分の名詞修飾と判断できるもの(「ひこぼし」という、とても働き者の男性を見つけました)や修飾が複数あり、そのうち対象の修飾があるもの(おりひめというとても美しい女性)も含む。

また、学習者の産出した名詞修飾節で、誤用を含むものは、誤用の形ではなく、修正したもので判断を行う(銀河の近くに(→で)「彦星」という牛のお世話をして(→している)若い青年が見つかりました。)

分析対象から除いたのは、被修飾名詞が修飾節における文法的役割がない外の関係(牛にえさをあげる仕事)、形式名詞(「おりひめ」の作ったもの)、準体助詞(二人の願い事がかなうのがこの7月7日なので)、連体詞によるもの(そんなおりひめ)、「の」を介するもの(神様たちの服)、形容詞で補語を伴わず非過去のもの(かなり働き者で有名な男)、「動詞・形容詞の条件+の」(結婚してからの二人)、副詞的成分(たくさんの人の服)である。そして、談話展開に関わる名詞修飾を調査するため、物語ではない部分は分析の対象外とした(知らない人のためにこれから七夕についてお話ししたいと思います)。

### 4. 2. 分類基準

本研究では、先行研究の成果と課題を踏まえ、4つの分析項目を設定し、「行為主体者」「時間差あり」タイプの名詞修飾を抽出するための新たな分類基準を提案する(図2、図3、表3)。この基準は、先行研究の成果を援用しながら、次の二つの点においてオリジナリティを持っていると考える。

まず、「行為主体者」を抽出するために、これまでの研究では、③被修飾名詞の有生性をメインに、①主節における修飾節の文法的役割（増田 2002）、または②修飾節における被修飾名詞の文法的役割（大関 2008）を加えていたが、本研究では、③に①②の両方を加え、分析項目とした。これにより、より正確に「行為主体者」を捉えることができる（図 2）。

次に、「時間差あり」の抽出に、被修飾名詞の状態性という枠組み（大関 2008）を用いて、時間差判断の前提を設定し、そのうえで時間差の有無を分けるという本研究で新たに提案した基準は明確であると考えられる。したがって、「時間差あり」タイプをより厳密に抽出できるといえる（図 3）。具体的な分類は以下に述べる（表 3 参照）。

表 3 分析項目

分析項目	分類	例
①修飾節が主節における文法役割	独立名詞句、名詞句+は、が	はた織りをせず、機械をホコリまみれにしてしまうおりひめ。(j007)
	主語	毎日服ばかり作って自分の休む時間さえなかった (k032)
	目的語（「が」を伴い対象・知覚の対象となるものも含む）	神様は彼女が作った服（→が）大好きで (c008) 真面目で一生懸命住んでいるギョウウという男の人が気に入った (k040)
	その他の補語	地上に住んでいる牛を育つ男と結婚をさせました。(k029)
	名詞述語文の述語	彼は牛を育つ人でした。(k011)
②被修飾名詞が修飾節における文法役割	主語	牛にえさをあげる仕事をしている「ひこぼし」という男の人 (j001)
	直接、間接目的語	神様が、着る服はだんだん少なくなってきて (c045)
	その他	一年に一回、二人が会える日を決めたのです。(k003)
③被修飾名詞の有生性	有生	地上世界のギョウウという男の人 (k023)
	無生	そのせいで、私の着る服も作らなくなって (c059)
④修飾部の状態性	属性・状態	娘は自分が着ているボロボロの服を作ろうともせず (j011)
		おりひめに合う相手を見つけてやることにしました。(j023)
		もともと身分違う二人が結婚するなんて (c054)
	習慣	おりひめは毎日一生懸命はたをおっているまじめな女性 (j023)
		ひこぼしもとても働きもので、毎日牛のえさをやり、畑仕事をしっかりするまじめな男性でした。(j004)
	進行	“玉皇大帝”はこの一番かわいがっている娘にいい婿を (c050)
		どうしようと悩んでいるお二人の姿を見て (c061)
過去・未来	仲良くなった2人は仕事をほったらかして (j030)	
	2人のけっこんをよるこんでいた神さまはがっかりして (j027)	
	それがかわいそうだった（→かわいそうだと思った）カラスは自分が橋になり、二人が会えるようにしてくれました。(k011)	

①修飾節が主節における文法役割は大関（2008：101表4-4）を参考に設定した項目である。3. で述べた「述語なし」タイプに加え、「名詞述語文の述語」もコンピュータで表す時間は発話時点のもの（本研究では時間差判断不可タイプ）であるため、主節の生起時点が捉えられないと考え、時間差の有無の判断から外す。そして、②被修飾名詞が修飾節における文法役割は大関（2008：99表4-3）を参考に設定した項目で、③被修飾名詞の有生性は増田（2002）、大関（2008）を参考に設定した項目である。3. でも述べた通り、主節においても修飾節においても主語の役割を果たし、かつ有生のものは、「行為主体者」とし、談話の展開に関わる重要な名詞修飾のタイプであると考える（図2、例8参照）。

(8) それを聞いたおりひめとひこぼしは、また元の働きものにもどって、一生懸命働くようになりました。(j013、行為主体者、時間差あり)

④修飾部の状態性は大関（2008：110表4-5）を参考に設定した項目である。3. でも述べた通り、主節における文法役割が「主語」「目的語」「その他の補語」であり、かつ修飾部の状態性が「進行」「過去・未来」の名詞修飾のみ、時間差の判断ができる。そして、主節と修飾節の述語を見て、主節事態の生起時点と修飾節事態の生起時点が前後しているか、同時であるかによって、「時間差あり」「時間差なし」に分ける（図3、例8、例9参照）。

(9) 一年に一度しか会えないのに、どうすればいいの（→か）と悩んでいる二人の前に「喜鵲」があらわれてくれた（→あらわれた）。(c038中位群、時間差なし)

さらに、物語における名詞修飾の機能を分析するため、本研究では、日本語母語話者が名詞修飾を多く使用する9か所を物語の展開における9つのポイントとし、それぞれの名詞修飾の使用を調査する（表4）。

表4 物語の展開における9つのポイント

ポイント	例 (j018)
1 織姫登場	天の神さまは <u>おりひめ</u> という美しい娘と一緒に暮らしていました。
2 織姫を想う神様	「このままじゃ <u>おりひめ</u> は結婚できないなあ。」そう思った天の神さまは <u>おりひめ</u> の結婚相手を探しに行きました。
3 彦星登場	するととても真面目に働く <u>ひこぼし</u> という青年に出会いました。
4 彦星を気に入った神様	「この青年なら <u>おりひめ</u> をきっと幸せにしてくれるだろう。」そう思った天の神さまは <u>ひこぼし</u> と <u>おりひめ</u> を会わせることにしました。
5 結婚した二人	しかし結婚してからの二人はいつも愛し合っているだけでまったく働かなくなってしまうました。
6 怒った神様	そんな二人に怒った天の神さまは言いました。「なまけてばかりいないで真面目に働きなさい。」
7 離れ離れになった二人	ひきさかれた二人はとても悲しみました。その後二人は悲しくてずっと泣いていました。
8 困った神様	それを見た天の神さまは「もし前のように真面目に働いたら、一年に一度二人を会わせてあげよう。」
9 許しを聞いた二人	それを聞いた二人は一生懸命働きました。



### 4. 3. 分析方法

分析方法は、まず、4. 1. で述べた基準で分析対象を取り出し、次に、取り出された名詞修飾に4. 2. で述べた基準で①②③④のタグをつけ、分類を行う。そして、①②③の分類に基づき「行為主体者」を抽出し、①④の分類に基づき、時間の有無を判断し、「時間差あり」を抽出する。さらに、物語の展開における9つのポイントにマークをつける。

### 4. 4. 研究課題

先行研究を踏まえ、上記の分析基準を設定し、本研究では、以下の3点を明らかにする。

- (研究課題1) 日本語母語話者に比べ、中上級学習者が使用する名詞修飾節について、「行為主体者」タイプが使えないか。中国語母語話者と韓国語母語話者間での名詞修飾の使用傾向が違うか。
- (研究課題2) 日本語母語話者に比べ、中上級学習者が使用する名詞修飾節について、「時間差あり」タイプが使えないか。中国語母語話者と韓国語母語話者間での名詞修飾の使用傾向が違うか。
- (研究課題3) 物語展開のポイントにおける名詞修飾節の使用は、日本語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者間で使用傾向が違うか。

## 5. 使用データ

本研究では、YNU書き言葉コーパスのタスク12を用いて分析する。YNU書き言葉コーパスは日本国内でデータを収集した、日本語母語話者、日本語学習者の作文コーパスである。作文タスクは、実際の生活における「書く」活動を重視し、実際に起こり得る12のタスクからなり、いろいろな読み手（特定・不特定）を意識させており、文章のスタイルや長さのバリエーションが豊富であるのが特徴である（金澤 2014：3-6）。

YNU書き言葉コーパスを用いる理由は主に3つある。まず、3. でも述べた通り、学習者の習熟度が中上級に統制されているため、複数の母語（中国語、韓国語）の学習者間で比較分析ができるからである。次に、3. でも述べた通り、作文の評価をもとに、上位群、中位群、下位群に分けられており、相対的に中級（下位群）から上級（上位群）にかけての変化を見ることができからである。また、作文タスクが現実であり得るタスクであり、読み手を意識させたうえで、伝える「書く」活動をさせているからである。

そして、YNU書き言葉コーパスのタスク12を用いる理由は、まず、タスク12が物語の作文で、名詞修飾の使用が想定されるからである。タスク12の内容は、小学校新聞の昔話コーナーで、「七夕伝説」の物語を紹介するというものである。具体的には、

「誰がいつどんなことをしたか」といった物語の展開をわかりやすく示す必要があるため、名詞修飾や接続表現の使用が想定される。次に、日本語母語話者や韓国語母語話者と比べ、中国語母語話者は連体修飾表現を用いないことが原因で、単文の羅列が目立ち、結束性を感じられない例が多いと指摘されている（金澤 2004：262-263）。以上の理由から、本研究ではこのタスク12を用いて、名詞修飾の使用実態を調査する。

## 6. 結果と考察

調査結果は表5に示す。日本語母語話者の一人当たりの名詞修飾の使用が7.57回と、増田（2000）の1.56回や、矢吹ソウ（2013）の5作文7.0回より多いことから、使用データが名詞修飾の調査に適していると考えられる。

表5 一人当たりの使用数 (SD)

母語	作文評価	名詞修飾の総使用数	行為主体者	時間差あり	展開ポイントでの名詞修飾
日本語	—	7.57(2.75)	4.30(1.88)	3.57(1.54)	3.73(1.34)
中国語		4.40(2.75)	2.07(1.93)	1.20(1.74)	2.03(1.40)
	上位群	5.90(2.77)	3.20(2.18)	2.20(2.04)	2.70(0.90)
	中位群	4.70(2.72)	2.30(1.68)	1.20(1.60)	2.50(1.57)
	下位群	2.60(1.43)	0.70(0.64)	0.20(0.60)	0.90(0.83)
韓国語		7.03(2.73)	3.97(2.06)	3.83(2.07)	3.47(1.38)
	上位群	8.70(2.45)	4.70(2.37)	5.00(2.05)	4.10(1.22)
	中位群	6.40(3.14)	3.60(2.33)	3.60(2.25)	2.90(1.45)
	下位群	6.00(1.48)	3.60(0.92)	2.90(1.14)	3.40(1.20)

各調査項目において、日本語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者間の使用傾向に違いがあるかを調べるため、クラスカル・ウォリス検定を行う。その中で、有意差が出た場合、日中、日韓、中韓のどこで差が出たかを見るため、多重比較にマン・ホイットニー検定を用い、有意水準調整のため、ボンフェローニの補正を行う。また、作文評価での上位群と下位群間の使用傾向に違いがあるかを調べるため、中国語母語話者、韓国語母語話者それぞれの上位群と下位群間で、ウィルコクソンの順位和検定を行う。

### 6. 1. 全体の傾向

名詞修飾の総使用数について、クラスカル・ウォリス検定を行ったところ、有意差が見られた ( $H(2) = 19.14, p < .001$ )。多重比較にマン・ホイットニー検定を行ったところ、日本語母語話者は中国語母語話者より多く ( $U = 192.00, p < .01$ )、韓国語母語話者も中国語母語話者より多いこと ( $U = 212.00, p < .01$ ) がわかった。日本語母語話者と韓国語母語話者間では、有意差が見られなかった ( $U = 362.00, p = .19, n.s.$ )。

上位群、下位群間で使用傾向が異なるかを調べるため、ウィルコクソンの順位和検定を行ったところ、中国語母語話者 ( $U = 13.00, p < .01$ ) も韓国語母語話者 ( $U = 212.00, p < .05$ ) も上位群が下位群より有意に多いことがわかった。

日本語母語話者は中国語母語話者より多く名詞修飾を使用する点においては、伊藤 (2012) でも同じ結果を得ている。一方、韓国語母語話者の使用について、矢吹ソウ (2013) では、韓国語母語話者の名詞修飾の使用が日本語母語話者より少なく、中国語母語話者と同程度の使用が見られており、本研究の結果と異なっている。それは、研究対象である韓国語母語話者の習熟度による違いではないかと考えられる。矢吹ソウ (2013) では大学2年生を終了した学習者、つまり中級未満と思われる学習者を対象としているが、本研究では、中上級の学習者を対象としているため、名詞修飾の使用が多いのだと考えられる。

上位群が下位群より名詞修飾を多く使用しているというのは、上位群になるにつれ使用が増加するということである。伊藤 (2012) では、初中級と思われる中国語母語話者は、習熟度が上がるにつれ、名詞修飾の使用が増えると述べている。本研究では厳密には習熟度ではないが、母語話者の評価で上位群のほうがより名詞修飾を使用していることがわかった。

## 6. 2. 研究課題 1 : 「行為主体者」の使用傾向

「行為主体者」について、クラスカル・ウォリス検定を行ったところ、有意差が見られた ( $H(2) = 19.19, p < .001$ )。多重比較にマン・ホイットニー検定を行ったところ、日本語母語話者は中国語母語話者より多く ( $U = 178.00, p < .01$ )、韓国語母語話者も中国語母語話者より多いこと ( $U = 218.50, p < .01$ ) がわかった。日本語母語話者と韓国語母語話者間では、有意差が見られなかった ( $U = 362.00, p = .60, n.s.$ )。

上位群、下位群間で使用傾向が異なるかを調べるため、ウィルコクソンの順位和検定を行ったところ、中国語母語話者は上位群が有意に多いが ( $U = 6.50, p < .01$ )、韓国語母語話者は上位群と下位群間に有意差が見られなかった ( $U = 28.00, p = .09, n.s.$ )。

先行研究では、学習者が「行為主体者」タイプを使えていないと指摘されているが、本研究では、中上級学習者である韓国語母語話者が日本語母語話者と同程度に使用していることが明らかになった。これは先行研究の対象者である韓国語母語話者の習熟度が低いからだと考えられる。

## 6. 3. 研究課題 2 : 「時間差あり」の使用傾向

「時間差あり」の使用数は、クラスカル・ウォリス検定を行ったところ、有意差が見られた ( $H(2) = 28.71, p < .001$ )。多重比較にマン・ホイットニー検定を行ったところ、日本語母語話者は中国語母語話者より多く ( $U = 143.00, p < .01$ )、韓国語母語話者も中国語母語話者より多いこと ( $U = 138.00, p < .01$ ) がわかった。日本語母語話者と韓国語

母語話者間では、有意差が見られなかった ( $U=426.00, p=.72, n.s.$ )。

上位群、下位群間で使用傾向が異なるかを調べるため、ウィルコクソンの順位和検定を行ったところ、中国語母語話者 ( $U=15.00, p<.01$ ) も韓国語母語話者 ( $U=20.00, p<.05$ ) も上位群が下位群より有意に多いことがわかった。

「行為主体者」同様、先行研究では、学習者が「時間差あり」タイプを使えていないと指摘されているが、本研究では、中上級学習者である韓国語母語話者が日本語母語話者と同程度に使用していることが明らかになった。これは先行研究の対象者である韓国語母語話者の習熟度が低いからだと考えられる。

では、なぜ中国語母語話者の「行為主体者」「時間差あり」の使用が少ないのか。その理由として、中国語は日本語と違い、「情報付加的修飾節」が用いられることが少なく、日本語と対応することが少ないと指摘されている(堀江・パルデン2009: 61-73)。例えば、例8の日本語を中国語に訳すと(8)'a'になるが、それより、名詞修飾を使わず節を並べた(8)'b'のほうが自然である。一方、韓国語は日本語と類似しており、(8)'c'のような表現が用いられる。

(8) (再掲) それを聞いたおりひめとひこぼしは、また元の働きものにもどって、一生懸命働くようになりました。(j013)

(8)'a. 听了天神的话的织女和牛郎又像从前一样勤恳努力地干活了。

(日本語訳: 天の神さまの話聞いた織姫と彦星はまた元のように一生懸命働くようになりました。)

b. 听了天神的话, 织女和牛郎又像从前一样勤恳努力地干活了。

(日本語訳: 天の神さまの話聞いて、織姫と彦星はまた元のように一生懸命働くようになりました。)

c. 그것을 들은 직녀와 견우는 다시 처음처럼 열심히 일하게 되었습니다。

(日本語訳: それを聞いた織姫と彦星はまたもとのように一生懸命働くようになりました。)

中国語と日本語のこのような違いが、中国語母語話者が日本語の名詞修飾を習得する際、「行為主体者」「時間差あり」の習得を難しくしていると考えられる。

#### 6. 4. 研究課題3: 物語の展開ポイントにおける名詞修飾の使用

物語の展開における9つのポイント(表4)の一人当たりの出現数を調べたところ、日本語母語話者はすべてのポイントで一人当たり0.8回以上出現しているが、学習者は「2織姫を想う神様」「4彦星を気に入った神様」「9許しを聞いた二人」の3つのポイントの一人当たりの出現数が0.7回を下回っていることがわかった。七夕の物語が大きく2種類あり、さらに、中国の物語では罰を下し、最初から7月7日にだけ会うことを許しているなど、物語の展開は国によって異なっていると考えられる(金澤2004)。展開ポイントの出現数による名詞修飾の使用数への影響を避けるため、2、4、9の3

つのポイント进行分析対象から外し、名詞修飾の使用进行分析する<sup>3)</sup>。

物語の展開における6つのポイントの名詞修飾の使用数<sup>4)</sup>は、クラスカル・ウォリス検定を行ったところ、有意差が見られた ( $H(2) = 19.54, p < .001$ )。多重比較にマン・ホイットニー検定を行ったところ、日本語母語話者は中国語母語話者より多く ( $U = 179.50, p < .01$ )、韓国語母語話者も中国語母語話者より多いこと ( $U = 217.50, p < .01$ ) がわかった。日本語母語話者と韓国語母語話者間では、有意差が見られなかった ( $U = 408.50, p = .53, n.s.$ )。

ここでは、物語の展開ポイントの中でも、ポイント6に注目したい。なぜなら、ポイント6は七夕の物語において「起承転結」の「転」に当たる重要なポイントだからである。実際、日本語母語話者がポイント6で一番多く(30回)の名詞修飾を使用し、すべてが「行為主体者&時間差あり」タイプである。これは、物語の展開において名詞修飾が「転」の役割を担っていることを示唆している。したがって、名詞修飾のこの談話展開機能を明らかにするため、ポイント6を例に質的分析を行う。

まず、日本語母語話者の名詞修飾の使用例を見ると、日本語母語話者は「怒った」(16回)、「見かねた」(5回)、「思った」(3回)、「見た」(2回)で神様(織姫の父親)を修飾している(例10参照)。

(10) とうとう怒ったおり姫の父親は、二人を川の東側と西側に別々にしてしまいました。(j026)

一方、学習者はどのような表現を使ったのか。中国語母語話者は日本語母語話者と似た名詞修飾を使用する例も見られたが、「聞いた」(2回)、「怒った」「怒りだした」「知った」「(織姫を)見なくなった」「(空を)管理する」(各1回)のみである。代わりに、「怒って」(7回)、「聞いて」(6回)、「怒った」(4回)などを使用する例が多く見られた(例11、12参照)。韓国語母語話者は「見た」(9回)、「怒った」(4回)、「激怒した」(2回)で神様を修飾する例が見られたと同時に、「怒って」(2回)、「見て」(2回)のような使用例も見られた(例13参照)。

(11) 大天帝さまはそれを聞いて怒ってしまいました。(c002 上位群)

(12) だから、神は怒ったので、無理やりに二人を離れさせちゃったのです。(c013 下位群)

(13) それでお父さんは怒って二人は別れさせます。(k037 上位群)

このように、学習者は名詞修飾の代わりに「(接続詞+)テ」または接続助詞を使用することがわかった。テは学習者にとって初期に覚えた文をつなぐ手段の一つであるため、困ったときに無意識に使われると考えられる(田中 2005)。本研究では、中上級学習者でも名詞修飾の代わりに、接続形式テを用いることが確認できた。そして、学習者が接続詞、接続助詞を名詞修飾の代わりに使用していることについては、増田(2000)でも同様の結果が出ている。

## 7. まとめと今後の課題

本研究は先行研究を踏まえ、「行為主体者」「時間差」を定義し、新たに分類基準を設定した。そのうえで、習熟度が統制されている、学習者の母語が複数あるYNU書き言葉コーパスを用いて、名詞修飾の使用実態を調査した。

その結果、学習者が使えていないとされる「行為主体者」「時間差あり」タイプの名詞修飾を、韓国語母語話者が日本語母語話者と同程度使えていたことがわかり、同時に中国語母語話者は使えていないことがわかった。これは、6.3.でも述べた通り、学習者の母語である中国語と韓国語の影響によるものだと考えられる。そして、作文評価が上がるにつれ、「行為主体者」「時間差あり」タイプの名詞修飾の使用が増えると考えられる。さらに、本研究では、談話展開ポイントを決め、日本語母語話者が談話展開の機能で名詞修飾を使用することや、学習者が名詞修飾の代わりに、「(接続詞+)テ」または接続助詞を使用することが明らかになった。

名詞修飾は初級で扱われることが多いが、制限的名詞修飾がほとんどであるうえ、非制限的名詞修飾の機能の説明や産出を促す練習は行われていないのが現状である。本研究では、中上級の中国語母語話者でも「行為主体者」「時間差あり」タイプの名詞修飾を使えていないという結果を踏まえ、以下のように教育現場に提案したい。まず、中級学習者を対象に、談話展開が求められる段階で、非制限的名詞修飾の機能を明示的に指導する。また、作文指導において、接続詞、接続助詞などと合わせて、文脈をつなぐ手段の一つとして、非制限的名詞修飾の使用の教示を行うと効果的であろう。さらに、学習者の母語を考慮した指導が必要であり、中国語のような日本語と名詞修飾の使用傾向の異なる言語を母語とする学習者の場合、名詞修飾の使用を促すには、読解などでインプットを増やす方法も考えられる。

今後の課題としては、まず、名詞修飾の習得に母語の影響が考えられるが、2か国語だけでは不十分なため、他の母語話者のデータを調査する必要がある。次に、名詞修飾の使用が話し言葉と書き言葉とで違いがあるか、話し言葉と書き言葉両方のデータを調査しなければならない。

## 注

- 1) 作文の評価は、YNU書き言葉コーパス独自の評価基準であり、「タスクの達成」「タスクの詳細さ・正確さ」「読み手配慮」「体裁・文体」の四つの観点から各タスク作文を評価し、点数化したものである。
- 2) 増田(2002)では、例3(増田2002では例10)の判定について、以下のように述べている。

(10)では、連体節の述語自体は「立っている」で「行為」ではないが、主節が「口をあけさせようとした」という当該の「ヒト」の行為を述べているので、その意味で、(10)の主名詞も「行為主体者」と見ることにする。(増田2002:49、注

- 4)
- 3) 残りの6つのポイントの出現数は、クラスカル・ウォリス検定を行ったところ、有意差が見られなかった ( $H(2)=5.59, p=.06, n.s.$ )。
- 4) 使用数は延べ使用回数であり、一つのポイントで2つ名詞修飾節が使用された場合は2とカウントする。

## 参考文献

- 伊藤絵梨子 (2012) 「談話データから見る連体修飾節の使用実態—初級日本語教科書との比較から—」『葛野』16、京都外国語大学、42-61
- 大関浩美 (2008) 『第一・第二言語における日本語名詞修飾節の習得過程』くろしお出版
- 金澤裕之 (編) (2014) 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房
- 田中真理 (2005) 「学習者の習得を考慮した日本語教育文法」野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版、63-82
- 堀江薫、プラシャント・パルデシ (2009) 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』研究社
- 増田真理子 (2000) 「談話展開に関わる接続形式と、それに代わる連体修飾節の使用について—日本語学習者と母語話者が産出したテキストの比較から—」『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、51-56
- 増田真理子 (2001) 「〈談話展開型連体節〉『怒った親は子どもをしかった』という言い方」『日本語教育』109、日本語教育学会、50-59
- 増田真理子 (2002) 「学習者はどのような連体修飾節を使っているか—日本語学習者が産出したテキストの分析から—」『多摩留学生センター教育研究論集』3、東京農工大学留学生センター・電気通信大学留学生センター (編)、43-50
- 矢吹ソウ典子 (2013) 「日本語学習者・母語話者によるストーリーテリングでの連体修飾節の用法」『言語文化と日本語教育』46、お茶の水女子大学日本言語文化学会、1-10
- 山田敏弘 (2004) 「非限定的名詞修飾の機能」『岐阜大学 国語国文学』31、岐阜大学教育学部国語教育講座、1-13

本稿の執筆にあたり、多くのご指導をくださった奥野由紀子先生、統計についてご助言をくださった森篤嗣先生、貴重なご助言をくださった査読者の先生方、ご助言をくださった奥野ゼミの皆様、ネイティブチェックをしてくださった皆様に心よりお礼申し上げます。本研究は「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」(通称: YNU書き言葉コーパス)を利用しました。代表の金澤裕之先生をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。